

特集

人間禅第三世総裁 磨甄庵白田劫石老師 追憶尋思

追憶尋思の詞.....	稲瀬	光常
第三世総裁 磨甄庵劫石老師 追悼号の 発行によせて.....	丸川	春潭
嗚呼 磨甄庵劫石老師!!	石田	妙耕
今日は死ぬ日.....	内田	慧純
修行十戒.....	白田	劫石

人間禅第三世総裁ませんあん磨甄庵ごっせき白田劫石老師は、耕雲庵立田英山老師から厳しい鉗錘けんづい（師僧が弟子を鍛錬すること。）を受けられました。師家分上しけぶんじょうの印可（悟境の円熟を師家が認めること。この印可を受けて初めて衣鉢えはつを嗣つぐことができる。）を受けられた後、人間禅の師家として、さらには総裁として、不惜身命財ふじやくしんみょうざいで在家禅の挙揚こよつ（衆に示して導くこと。）に生涯ささを捧げられました。その不朽のご功績につきましては、本特集の中で紹介されております。

磨甄庵老師は、結婚や家庭を持った女性の修行について、貴重なアドバイスを残されております（『人間禅』第68号・第83号）。

『修行十戒』は、禅の修行を志した青年学徒が皆、終わりを全うするようにとの熱い思いを込めて書かれたものであります。ご熟読いただければと存じます。

追憶尋思の詞

稲瀬 光常

人間禅教団三世総裁^{まぜんあん}磨甑庵^{ごっせき}白田劫石老師の教団葬に当り、会下^{えか}の大衆を代表して追憶尋思の詞を捧げます。

老師は御高齢かつ御病気がちの御身にも拘らず、総裁御引退後も一貫して現役の師家^{しけ}（注1）として大法を拳揚して来られましたが、去る（平成21年）2月11日午後9時55分、遂に天寿^{てんじゆ}を全うされ帰寂されました。多年に亘り、細やかなお心配りをされて老師を支えられた、奥様や御遺族の皆様のお悲しみはいかばかりかとお察し申し上げますとともに、長年師父として敬慕申し上げてきた私共会下の大衆にとりましても、悲しみこれに過ぐるものはなく、誠に痛惜の極みであります。ここに、仏祖の慧命^{えみよ}の護持と大法流通^{こほりゆう}のため、全精力を注がれた93年の尊い御生涯^{しの}を偲び、心より哀悼の誠を捧げます。

老師は大正4年7月10日東京にお生まれになり、府立第七中学校を4年で修了し、府立高等学校に進まれました。府立高校在学中結核を病まれ、これを機に人間の死について強い疑問を抱かれるようになり、その決着のため哲学を学ぶことを決意され、昭和10年4月、和辻哲郎教授の率いる東京帝国大学文学部倫理学科に進まれました。老師はこの東大在学中に、講師をされていた長屋喜一先生の知遇を得られ、先生の導きにより、耕雲庵立田英山老師の『科学と宗教』と題する講演を聴き、大変感銘を受けられたのが機縁となって、昭和12年12月、当時の両忘協会において耕雲庵老師に入門されました。ここに、老



第三世総裁 磨瓢庵白田劫石老師

師の70年に及ぶ禅者としての
第一歩が印しるされたのであります。

老師は昭和13年3月に東大を卒業され、文部省に奉職されて、教学局等で執務されましたが、この間の15年1月には劫石の道号を授与されておられます。

昭和19年3月に文部省を退職され、千葉高等園芸学校の講師に就任されましたが、翌年太平洋戦争の戦況がいよいよ厳しくなるに及んで、耕雲

庵老大師が護法のため山梨県清里村に疎開されるのに、御家族と共に同行され、乏しい疎開生活の中で修行を継続されたのであります。

戦後は千葉高等園芸学校に復職され、新制千葉大学が発足するや文理学部助教授となられ、間もなく教授に就任されました。修行事においては、耕雲庵老大師の下 昭和24年3月に人間禅教団が創設されるや、市川の本部道場内に居を移され、『人間禅』誌の編集に当られる等、教団幹部のお一人として発足間もない教団の基盤構築に尽力されました。

その後、御自身の修行にも一段と激しさを加えられ、昭和29年5月遂に大事を了りょうひつ畢して「磨瓢庵」の庵号を授与され、続いて教団創立10周年に当る33年5月には師家分上の印可を受けられて、阪神支部を皮切りに、房総支部、岳南支部の3支部の担当師家として、大法を挙揚されたのであります。

千葉大学にあっては、専門の御研究や学生達の教育とともに、大学

評議員や改組後の人文学部長として、大学の運営にも深く関与されました。60年安保や70年安保等に伴う学園紛争の際には、常に重要な役割を荷なわれ混乱の收拾に当られました。特に昭和43年に自衛官通入学問題で大学本部が過激派学生によって封鎖され、研究、教育機能が全く停止する事態となり、多くの高名な教授の方々が学生から専門バカと揶揄されて右往左往する中であって、常に堂々とした態度で大学側を代表して対応された老師の存在なくしては、早期の混乱收拾は困難であったといわれております。その後千葉大学々長候補に擬せられたこともありましたが、老師は人間禅の師家としての使命を優先されました。

そのような中、昭和51年12月教団の第二世総裁妙峰庵佐瀬孤唱老師が急逝され、深い悲しみの中で翌52年5月、推されて人間禅教団総裁第三世に就任されたのであります。

時に老師は61歳であられました、それから80歳まで実に19年間に亘り、教団総裁として不惜身命財の御活躍をされたのであります。老師は総裁に就任されるや、「現代社会、特にその精神界は危機的状況にあり、人々はその帰すに迷っているが、それは人間畢竟いかにあるべきかという究極の眼目を見失い、その生命の根基を失却しているからである。これは結局大自然を一貫する不生不滅の如是法(注2)の存在と本心本性を身をもって悟得する道を知らず、真実の人間形成の道を行じ得ないための現象に外ならない。」と喝破され、人間禅流通の必要性を宣明されました。

その後教団は、総裁としての老師の力強い御指導で教勢が飛躍的に拡大し、質量共に発展の一途を辿り、総裁御在任中6支部が新設され、8支部において新しく道場が建立され、団員数も2倍以上の増加を見たのであります。この間老師は、教団本部、中央支部、東京第一支部、房総支部、東海支部、坂東支部をお一人で直接担当され、年間実

に18撰心会（注3）を嘗弁されるなど、身を粉にしての獅子奮迅のご活躍をされ、その結果、寶鏡庵長野善光老師をはじめとする多くの嗣法者や多数の有為な人材を打出されたのであります。

老師は、耕雲庵老大師の厳しい御鉗鎚を受けられて体得された大法を、御専門の哲学、倫理学の研究等を通して身に付けられた洋の東西に亘る深い学識をもって自由自在に展開され、その説かれるところの法は、まさに的々高雅、的々分明な斯界における最高峰の内容をもつものであります。膝下に参じた多くの修行者が、老師の御提唱に接し、どれ程感動し、またどれ程勇気づけられ、箇事の修行（注4）に立ち向かう力を与えていただいたか、筆舌に尽くし難いものがあります。

老師の長年の御説法のうち、最も代表的なものが、大燈国師の語録に白隠禅師が下語（注5）と評唱（注6）を加えた『槐安國語』を講じられた御提唱でありました。大燈国師、白隠禅師というまさに五百年間出の大宗匠が、絶大なる道眼・道力と燃えるような赤誠をもって著された『槐安國語』は、老師のお力なくしては、今日何人もこれを講じ切ることではできなかつたでありましょう。その御提唱は今、老師畢生の大作『槐安國語鈔講話』3編となり、後世のための貴重な法財として残されることとなりました。

一方、参禅における老師の学人接得の有様は、知る人ぞ知る実に厳しいもので、その室内こそはまさに奪命の神符、法窟の爪牙というにふさわしいものであります。文字通り人情涓滴も施さない孤危険峻な応接に徹せられ、真の慈悲行を行取されたのであります。老師から賜りました熱喝嗔拳の御鉗鎚を思い起こすにつけ、今に寒毛卓豎（注7）するを憶えます。

老師は満80歳となられた平成8年5月、後事を第四世総裁青嶂庵荒木古幹老師に託されて総裁を引退されましたが、その後も房総支部、

坂東支部の担当師家を続けられました。しかし総裁御引退後は、リュウマチ、気管支拡張症、高血圧症、そして二度の硬膜下血腫等の病魔との闘いの日々であり、まさに身体の限界と師家任務の遂行という、二つの間の細い線を追求し続けられた日々でありました。病魔と闘いながら、渾身の力を振りしぼって嘗弁された摂心会の日々を思い起こすたび、老師の大慈大悲だいじだいひに対し、ただただ合掌あるのみでございます。

老師は大法の挙揚すべを全てに優先させてこられたため、個人的な楽しみを廃されてきた感がありましたが、私たちの知る唯一のお楽しみは、劫石という道号ちなに因んだ石の収集鑑賞であったと思われます。房総支部は、昭和59年に道場が出来るまでの二十数年間、夏期摂心会を長野県飯田市の長久寺などを借用してごんしゅう厳修しましたが、円了の翌日は一日天龍川の川原で石拾いを楽しまれました。そのような老師であられましたので、平成12年房総支部創立40周年の記念として、老師を顕彰するための記念の石を道場内に設置したいとの支部の要望も快くお聞き届けいただき、自ら福島まで足を運ばれて選定された大石に「磨甄石」と銘打たれ、その石に因んで、次のように書き残されました。【古徳いわ云く、大聖だいしゅう（注8）もし磨甄てきでんの法なくば、仏家じきし（注9）に正法ごんしゅう（注10）伝わらざるなり。これ仏祖嫡伝の直指かく（注11）なり。ここに人間禅の玄旨ごと如在せり。今この石に接してはよろしく是の如しずきの遠由を寂かに憶念せられんことを】と。この磨甄石が今後は私たちににら睨みをきかせてくれることになりましたが、石に託して老師が後世に伝えんとするものが何であるかを誤まることなく正受し、実践してまいりたいと存じます。

老師は終生、耕雲庵老大師を先師老漢とお呼びになり、深く敬慕されるとともに、老大師の師父であられた両忘庵釈宗活老師にも格別の尊崇の念を抱き続けられました。晩年に著された『道元禅師 学道用

心集講話』の中で、昭和15年に兵庫県多田の碧巖会^{へきがんえ}において、両忘老師が参じてきた若者に向けて詠まれた ゆく末は みちのしるべとあふがれよ 今は幼き若樹なりとも というお歌を長く心の支えとされてきたことを明かされ、「自分の生涯がこのお歌にお応えできるものとは思っていないが、それに向って自分なりに歩を進めることができたことを^{おも}憶い、心の底からの感謝で一杯である。」と述懐されておられます。両忘老師の提唱された終生自己教育を、身をもって実践躬^{きゆうこう}行された93年の御生涯は、まさに「みちのしるべ」と仰がれるに足る^{まこと}洵に尊い御生涯でございました。

今や教団は第五世総裁^{ほうこうあん}葆光庵丸川春^{しゆんたん}潭老師の御指導の下、布教面において多くの新軌軸が打ち出され、新たな展開が始まっております。特に老師が長年に亘り、心を砕かれてきた海外布教も実施に移され、晩年心血を注がれた『英訳^{がせん}瓦筈集』も、広く世界の人々への人間禅流通のための法財として活用される日が来るものと確信いたします。

老師は常々人間禅のあり方として「一本の樹が長い風雪に耐え、堂々とした姿に成長することはすばらしいことだが、その一本の樹が立っている一定の地域には、多くの樹木が共生して森林という形の絶妙な生の形態がつくられている。たとえ、一本の樹は枯れても、森林全体の生命は生き続けるものである。わたしたち在家の者の修行が、ただ個人々々の人間形成にあるばかりでなく、一つの僧伽^{そうぎゃ}であり教団であるというのは、これに似たものであり、これは先師老漢が^{のこ}遺されたかけがえのない遺産である。」と示してこられました。私たちは、この老師のお示しを深く胸に刻み、総裁を中心として僧伽としての教団の基盤を一層強固なものとし、永世に亘って人間禅の精神を展開すべく、渾身の力を奮ってまいりたいと存じます。どうぞお見守り下さい。

終りに当り、団員一同と共に改めて御生前の御教導に心から感謝申

し上げ、多年の御労苦に対し厚く御礼を申し上げます。

磨輒庵老師、本当にありがとうございました。

そして、洵に洵に御苦勞様でございました。

合掌

平成21年 5月 3日

稲瀬 光常 九拜

編集部注

(注1) 師家：禅の法脈を受け継いだ指導者。

(注2) 如是法：大自然の生命。

(注3) 撰心会：心を撰する会。撰心は、心を治めて散らさないの意。一定の期間（通常1週間）正脈の師家の指導の下に本格の禅の修行が行われる。

(注4) 箇事の修行：この事の修行の意。禅の修行。

(注5) 下語：禅者が自己の見解を示すために付ける語。

(注6) 評唱：古則（すぐれた古徳の残した語句）や公案に付けられた解説。

(注7) 寒毛卓豎：ぞっとすること。

(注8) 大聖：偉大な聖者の意。仏（覚者）。

(注9) 仏家：仏教徒。

(注10) 正法：真実の教え。仏の教え。仏となる教え。

(注11) 直指：^{ひゆ}比喩や遠回しの言い方によらず、直接、端的にそのものを示すこと。

著者プロフィール



稲瀬光常（本名 / 道和）

昭和22年、愛知県生まれ。弁護士（稲瀬法律事務所）。学校法人新田学園理事長。人間禅師家。庵号 / 金峰庵。

第三世総裁 磨輒庵劫石老師 追悼号の発行に寄せて

第五世総裁 葆光庵 丸川 春潭

師について語るということは原則的にはできない。しかし、第三世総裁磨輒庵白田劫石老師から50年に亘って受けた恩沢を私してはならないということと、更にこれからの教団の後輩への何らかの示唆となるならば、敢えて活字にして残すことも吝かであってはならないと考え、重い筆を取るものであります。

1 師家分上までの十数年間を振り返って

識大級になってから師家分上（注1）までの間、年月の進むに連れてだんだんと磨輒庵老師の小生への当りは厳しくなりました。特に200則の公案を見終わってからの約10年間は更に厳しく、主として200則以外の公案で絞り上げられました。この10年間は年間10撰心会以上をほとんど門外不出で参じ、徹宵撰心会も毎年5支部でやるような参じ方の年間スケジュールでしたが、平均して1則透るのに1年（門外不出の撰心会を10撰心会）以上かかっておりました。

呵責なき策励は、室内に止まることなくあらゆる場面に及びました。坂東支部長で直日（注2）の頃には、侍者（注3）の不始末を待っていたように目から火が出るほどしかられたこともあり、また総務時代に、房総支部撰心会で作務（注4）の時間帯に総務の事務の仕事をしているのを捉えて、後日関係者7名を本部隠寮（注5）に呼び集め、作務

をさぼるとは破門に匹敵するとの叱責とともに、100日間の参禅禁止をみんなの前で宣告されたこともありましたが（この100日の間に3撰心会を門外不出で、参禅なしで詰めましたが）。

磨輒庵老師は提唱でも、弟子を仕上げるには四六時中仇敵に当たるが如くであると何度か申されておりましたが、まさに文字通り、小生には仇敵に会うがごとくであり、弱点とか癖のあるところに、灼け火箸を突っ込み、抉るといふものでありました。また、獅子はその子を育てるのに谷底へ突き落として這い上がって来るのを待つという育て方をするものだというたとえも何度かお聞きました。ズバリその感覚を言えば、這い上がってくることを全く期待していない、這い上がって来なければそれまでだとスパッと割り切っている感じがしたものでした。

小生は師家のこの一貫した扱いに対して、避けず怯まず、正受し、そして唯ひたすら参じたのであります。これが禅の人間形成の最後のやり方であり、大宗匠でなければ徹底してできない、ありがたいというか、恐ろしい悪辣な教育方法であります。「耕夫の牛を駆り、飢人の食を奪う」教育方法であります。人情涓滴も施さずという言葉は良く聞きますが、これを実際に、文字通り行じ切るといふことは、容易なことではありません。しかしこれができないものは、師家の資格がないのであり、当人が末後周羅（注6）の一結をそぎ落としているかどうか怪しいということに懸かってくるのであります。

また磨輒庵老師が良く申されておりました「見師に等しきときは師の半徳を減ず、見師に勝りて初めて伝授するに堪えたり」ということも、本気で実際に実践されておられたと思われ。『見師に勝る』とは、どういうことか！と講座台から獅子吼（注7）され、睨み付けられたこともありましたが、ここが法の淵源を極めた境涯かどうかの急所であり、目の付け所であります。

200則の公案の見解を一応見たというレベルでは、師家分上はまだ

まだであります。まだというより、それは前提条件の一つくらいが整ったというものでしかありません。師家分上の境涯には、末後周羅の一結をそぎ落とすことが必須であり、その上で「見 師に勝る」境涯をしっかりと掴まねばならないのであります。

識大級の学人から師家分上を叩き出すのは、師家の最大の任務であり、師学共に命とつり換えの修羅場になるものであります。一つ間違えば学人を本当に殺すことになる。また一つ間違えば後世に禍根を残し、仏祖方には死んでも償いきれない罪を犯すことになるのであります。本気で殺してもいいと腹をくくるとを磨軛庵老師から教わりました。これからの人間禅のために、後世の法を断絶せしめないためのありがたい教訓であります。

2 師家、総裁になってからのご指導

寶鏡庵長野善光老師がご病気のとき師家代行を小生が命じられ、その初めての東京第二支部（現埼玉支部）の撰心会報告のために津田沼（千葉県習志野市）のご自宅にお伺いしたときは、従来とがらりと変わって、極めて穏やかな笑みを常に湛えて聞いていただきました。

それ以降、師家代行時代、師家時代、総裁になってからも含め、新しい施策、新機軸の提案等は、真っ先に名誉総裁のご意見をお伺いに参上しました。その中には、仮入門（参禅体験）制度、短期撰心会の試み、副担当制の導入、複眼育成の考え方、名誉団員制度、支部降格案件、進級人事、師家輔任人事等々ありました。その中のかなりの案件で、お叱りを頂くとか、異議を申されるとかの危懼を抱いて、津田沼のご自宅の門をくぐったことも何度かありました。しかし、進級人事の1件を除いては、全てご了承を頂きました。そればかりか、今までそういうことを考えなかったのが問題であるとか、大いに進めよとかの激励のお言葉で背中を押していただくのが常になりました。玄関を入るときには、必死で、恐らく蒼白な顔をしていたのではないかと

と思いますが、門を出るときには、頬がほころび、恐らく顔は紅潮していたのではないかと思われるものでありました。

今年(平成21年)2月11日に帰寂されて初めて気が付いたのですが、公正なジャッジを頂ける名誉総裁の存在が総裁にとって如何に大きかったかということを感じているところであります。すなわちお伺いすることができないということは、自分で最終的に正しい結論を出さなければならないということであり、これは極めて過酷な重い責任であります。

また最近気が付いたことは、磨甄庵老師だったらどうお考えになるかという自問を常にやり出したということであります。これは、磨甄庵老師が小生の中で生き続けておられる感じであります。まことにありがたい、心強いことであります。今後とも磨甄庵老師にお諮りしつつ、非力をカバーしていただき、任を全うする覚悟を追悼号の発行に当たり固めている次第であります。

3 磨甄庵老師の長寿について

平成18年5月5日の教団創立58周年記念式における小生の総裁挨拶の中で、名誉総裁磨甄庵老師の長寿について、次のようなお話しをしております。

本日も臨席いただいている磨甄庵名誉総裁が、今年卒寿を迎えられるというおめでたいお祝いの紹介とともに、若い人達への私からのメッセージをお話ししたいと思います。

磨甄庵名誉総裁は、元来は体が脆弱な方であり、若いころ結核を患われ大きな手術もされ、歯茎には爆弾のような病根を抱えておられ、また時には顔がゆがむほど腫らしておられました。年を取られてからはリュウマチにかかれ苦しまれましたし、頭を打って脳内出血を起こされ2回も頭蓋骨に穴が開けられました。最近では冬季には高

血圧と気管支拡張症による喀血かっけつと戦っておられます。

これらは私が知るところだけで一部と思いますが、90歳になられてもまだ鈴を振られている。すなわち禅しんじょうの師匠ほっせんの第一線ほっせんに立って法戦ほっせん場裏じょうりで熱喝しんけん噴拳をふるっておられるのであります。

若い諸君！ 何故それができるのか、考えていただきたい！

浅学非力の私が大宗匠とりの吐裏とりのを正しく拝むことはできませんが、私
 見方の見方を若い諸君に申し上げたい。

結論から申し上げて、それを可能にしたのは、正しい発菩提心ほつぼだいしん（注
 8）と一日一炷香いちちゅうこう（注9）であります。

正しい発菩提心の説明は、1週間の提唱でも言い尽くすことはできないものですが、新到の方に敢えて一口で言いますと、修行の志が自分のためだけではなく全ての人のための修行であるということであり
 ます。自分のためのみの修行ではないのであります。お釈迦様は、「衆生病むが故に我病む」といわれており、これは大乘仏教の根本思想であります。また正しい発菩提心は、衆生無辺誓願度、煩惱無尽誓願断、法門無量誓願学、仏道無上誓願成という仏の誓願を自分の誓願とする
 ということであり、この四弘しよくの誓願しやく（注10）は、通常3回唱えませんが、3回ということは、永遠に繰り返し続くということであり、病む衆生がいる限り続けられるというものであります。

この発菩提心が本物で正しくなければ、修行は全うできません。90歳まで鈴を振られるのはまさに、発菩提心あかしが如何に純粹で如何に強い
 かの証だということであり、若い諸君！ 若い間にこのことをよく腹に入れておいてほしいと思います。

また、名誉総裁の一日一炷香は、一日に一炷香坐るということでもありますが、一日が一炷香なのであります。

本当の三昧ざんまいの行には自ずと戒おのというものが付いてくる。それと同じように、本当の一日一炷香かくしゃくは、鬻かくしゃく鑠とした長寿が自ずと付いてくるものと確信いたします。

若い諸君！ いや若い諸君だけではなく、常任法務会の先輩諸兄をはじめとする布教の任に付いている方々！ 90歳まで自利利他の素願を転ずることを目標にしようではありませんか。これが、老師に対する法恩であります。

名誉総裁、無礼な下衆^{げす}の解釈をしましたがお許しいただきたいと思えます。そして、1年でも2年でも長く鈴を振られ、われわれの目標を高めていただければありがたいと思えます。

それから更に3年間、磨甌庵名誉総裁は鈴を振り続けられたのであります。まさに寒毛卓豎^{たくじゆ}であります。これは、長く教団にその範を身を以て示されたのであり、我々はそれをしっかりと受け止めなければならないと思えます。

長寿で自利利他の願輪^{めく}を廻らせることこそ、最高の人間力の開示であります。

もう一度申し上げます。「常任法務会の先輩諸兄をはじめとする布教の任に付いている方々！ 90歳以上まで自利利他の素願を転ずることを目標にしようではありませんか。」これが、第三世総裁磨甌庵老師に対する本当の追憶尋思になると考えます。

第三世総裁の鴻恩^{こうおん}に感謝しつつ、その御徳を損じたのではないかと懸念^あしつつ、筆を措き、焚香^{ふんこう}、九拝。

そこここに先師の影の春日かな
君がため恨みに^{ささ}捧ぐ梅一枝

合掌

編集部注

(注1) 識大級・師家分上：会員の修行歴により、地大級・水大級・火大級・風大級・空大級・識大級・師家分上の7階記に分けられている。

- (注2) 直日：禅堂内の最高責任者。摂心会が厳しく有意義に実施されるよう運営する。役位の督励、坐禅や作務の指揮を行う。
- (注3) 侍者：師家の身の回りの用事を果たす。
- (注4) 作務：坐禅による静中の工夫を清掃や畑仕事の動態に移して、動作中においても工夫を続け三昧力さんまいを養う修行。
- (注5) 隠寮：師家の居住するところ。
- (注6) 末後：最後の。
周羅：周羅髪のこと。出家剃髪ていはつの際に親教師の剃(髪をそること。)を受けるため、最後に残す数本の髪。
- (注7) 獅子吼：獅子のほえるように法を説くこと。
- (注8) 発菩提心：悟りを求める心を起こすこと。
- (注9) 一日一炷香：一日に少なくとも線香一本は坐禅すること。
- (注10) 四弘の誓願：四弘誓願。大乘仏教徒が持つべき、四つの弘こう大な(広大な)誓い。

著者プロフィール



丸川 春潭しゆんたん (本名/雄浄)

昭和15年生まれ。大阪大学理学部卒業。住友金属工業技監、日本鉄鋼協会理事を歴任。元大阪大学特任教授。現在、中国東北大学名誉教授。工学博士。昭和34年、人間禅立田英山老師に入門。現在、人間禅総裁・師家。庵号ほうこう/葆光庵。

嗚呼 磨 瓢 庵 劫 石 老 師 !!

石田 妙耕

磨瓢庵白田劫石老師は、惜しくも平成21年2月11日に御帰寂されましたが、まことに痛恨の極みであります。老師は禅の権化のようなお方でありました。

私が初めて参禅させていただきましたのは、昭和52年5月総裁に御就任されました5月の教団撰心会せっしんえの時でありました。この公案はぜひ老師に見ていただきたいと、ある一則をもって参禅いたしました。春秋の年2回の撰心会で、それも2泊3日か3泊4日の参禅では3年かかりました。「1則で3年とは、これはたまらん。」と、老師が御担当になる中央支部（現京葉支部）・東京第一支部（現埼京支部）・東海支部の撰心会に10年余り上京するようになりました。

公案も『瓦釜集』がせんしゅう（注1）外の末後の句いた（注2）に到りますと絶対に許さぬ構え、一時はとてもこのトンネルは抜け出せぬのではあるまいかと落ち込んだこともありました。毎回参禅する私に対して老師は、「新幹線で来るので、その気持は分るが。」とか、「座頭の振り小便じゃ。」と講座台より言い放たれることもありました。しかし、「こんなことで負けてたまるか。」と、なお一層必死に入室したのであります。

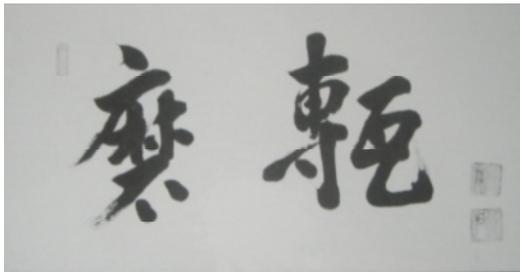
最初けんしゅうの見性も難関ろうかんであります。が、「末後の一句、始めて牢関ろうかん（注3）に到る」といわれるだけあって、末後周羅しゅうらの一結は銀山鉄壁でありました。打ち破って始めて千眼一時に開く真昼間!! 「自分は今まで何を迷っていたのかナ。」と氷の塊が溶ける有様でありました。昭和64年6月のことであります。人づてに聞かせていただいたところによ

りますと「妙耕さんを許そうかなと思っていても、手が鈴を振る。」と老師が仰^{おつ}しゃってくださいましたそうでもあります。その手のおかげをもちまして、妙耕は現在、ピン、ピン生き返っております。もしその鈴がなければ、恐らく今だにウロウロしているのではないかと思います。

昔、耕雲庵立田英山老大師が『碧巖集^{へきがんしゅう}』を講じられていた時に、「ここいら当りから師学共に命がけじゃ。」と仰っておられましたが、未熟者の私は「学人が命を取られるのは分るが、師家^{しけ}が命を取られるとは何ごとか。」と不審に思っておりましたが、やっと分ったような気がします。老師の御恩沢に三拝九拝させていただくばかりであります。

それは、老師の『槐安国語^{かいあん}』が『禅』誌に掲載されたことから始まりました。その『禅』誌をカナダ・モントリオールのマギル大学の東洋宗教学者ホリ ソウゲン師が読まれまして、「これは素晴らしい。もっと読みたい。」との連絡が岡山・曹源寺^{そうげんじ}の大智禅尼^{ぜんに}（米国人）に入り、禅尼からその旨お聞きしましたので、早速何冊かを集めて送ったことがあります。

ホリ ソウゲン師は1944年生まれのカナダ国籍日系3世のお方で、大徳寺で16年修行された後、京都府の長岡禅塾で森本省念老師の法を嗣^つがれていて、禅塾の塾長として後を引き継いでほしいと頼まれましたが、それを断ってカナダへ帰ってしまわれたお方です。現在、



磨転（磨転庵老師書）

師の『禅林句集』（英訳）も出版されております。

『^{かいあん}槐安国語』3冊も刊行されましたので、『^{ほぼ}槐安国語』・『^{ほぼ}主心お婆粉引唄』の外、^{うた}老大師の刊行書を一括そろえまして大智禅尼を通してホリ ソウゲン師に送っております。その後、『槐安国語』を英訳したいとのことでしたので、老師に申し上げてお許しを頂きましたことも申し伝えてありますが、その後どうなったかは分っておりません。老師は、外国人の心をも動かされたのであります。その偉大なる御功績にも合掌する次第であります。

合掌九拜

編集部注

（注1）『瓦筌集』：人間禅の公案集。筌は、竹を編んで作った一種の漁具。

（注2）末後の句：究極の境地に徹するという語。

（注3）牢関：堅牢な関所。

著者プロフィール



石田妙耕（本名 / 澄子）

大正12年、岡山県生まれ。昭和25年、人間禅立田英山老師に入門。現在、人間禅師家分上。庵号 / ^{れんげ}蓮華庵。

今日は死ぬ日

内田 慧純

「今日は死ぬ日」とは、何と衝撃的な一語か。

誰でも必ず死にゆくものと判^{わか}っているが、重篤な病人はいざ知らず、今日死ぬとは想像せずに生きている。

普通、死を恐れつつ生きている人も、自分が今日死ぬとは思わない。何となく明日も明後日も死なずに生きてゆくと思っている。いや、10年も20年も生きていたいし、生きているだろうと儚^{はかな}い夢をもって生きている。

日常的に、自分の死はいつ訪れるか計ることはできない。予告なしに訪れ、待てしばしはない。現在、世界中に日々発生する命の危険の数々、日本も例外ではない。

まさに諸行は無常。一刻も止まらず万物は流^{るてん}転する。流転こそ実相で真理である。『修証義』の冒頭^{しょう}に【生^{しょう}を明らめ死を明らめるは、仏家^{ぶつげ}（注1）一大事^{いんねん}の因縁^{いんねん}（注2）なり。】とあるが、心底銘記しなければならないと思う。

「今日は死ぬ日」とは、まことに厳しい語である。この一語、私は^{ませんあん}磨^{ちやうだい}瓢^{ちやうだい}庵^{ちやうだい}老師から頂戴した。

それまで勤めていた千葉大医学部を退職して、夫の研究のフィールドの長野県に移住する時のこと。

「しばらく千葉を離れますが、^{せっしんえ}摂心会には必ず出てきて参加します。」と御挨拶^{あいさつ}した。お暇^{いとま}する間際、老師から『今日は死ぬ日』と紙に書

いて額に貼^はっておくように。」とお示し下さった。

学生の頃、私は結核性腹膜炎の療養のため、休学したことがある。B29が100機飛来した郷里の前橋大空襲で逃げ惑ったこともある。死が身近に感じられた。その後平安に過ぎ、自分の死などは忘れていた。

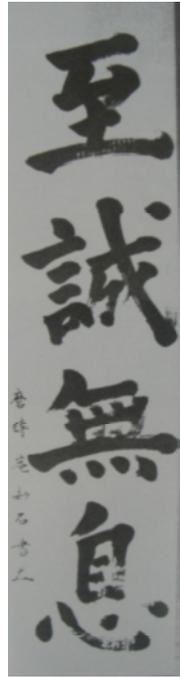
当時38歳の働き盛りで、日々忙しく元気に生きていた。

道すがら、「今日は死ぬ日」、「今日は死ぬ日」とつぶやきながら帰路についたことを、今も鮮明に思い出す。禅の教えの厳しさが身に沁^しみだ。痛烈な一語であった。

「今日一日しか生きる場がない。一日一日いま・ここで真剣に生きよ。」という生き方を教えていただいたと思った。

「今日死ぬ日」をどう生きたらよいのか、死ぬつもりで生きることではないか。私なりの工夫は、一行三昧^{いちぎょうさんまい}（注3）の生活を生きることがキーワードだと思った。「今日死ぬ日」は「今日生きる日」とグルッと回心できた。「今日死ぬ日」は、以後私の座右の銘となった。しかし磨輒庵老師には、＜思い出すよぢや惚^ほれよが足りぬ 思い出さずに忘れずに＞と俗謡をもって、集中し堅持することを教えられているにも拘^{かかわ}らず、あれから40年、省みて自分の怠け心がまことに恥ずかしい。

道元禅師の『正法眼蔵^{しょうぼうげんぞう}』の中で、【生といふときには、生よりほかにものなく、滅といふときには、滅のほかにものなし。かるがゆ糸に、生きたらばただこれ生、滅きたらばこれ滅にむかひてつかふべし。い



至誠無息
磨輒庵劫石書

とふことなかれ、ねがふことなかれ。】また【今一日、道（注4）を得て、佛意ぶつ いに随したがって、死なまんと思まう心ほっしんを先まず発ほっしん心ほっしんすべきなり。】と示された。まさに、「今日は死ぬ日」の教えと同義と思われた。「有限なる生命であるからこそ、いま・ここに必死の学道がくどう弁道べんどう（注5）に打ちこむように。」との教えである。

高齢となった今、いよいよ「今日は死ぬ日」と決定けつじょうしたく思う日々である。

（文責：編集部）

編集部注

（注1）仏家：仏教徒。

（注2）一大事の因縁：禅修行の一大目的。

（注3）一行三昧：いつでも、どこでも、何ごとをするにも、それに全力を打ち込んで余念のないこと。

（注4）道：仏道。悟り。

（注5）学道：仏道を学ぶこと。仏道を実践すること。

弁道：仏道を実践すること。

著者プロフィール



内田慧純えじゆん（本名／ふき）

大正11年生まれ。千葉大学医学部農村医学研究施設講師。医学博士。昭和34年、人間禅白田劫石老師に入門。人間禅師家分上。庵号／緝熙庵しゅうき。平成18年帰寂。

修行十戒

白田 劫石

一 学生あり、来たりて問う「聞くならく(注1) 仏道は無上なりと。何が故に、^{ぼっしん}発心して修行に志し^{しか}而も^{させつ}途上にして挫折せる者多き？」答えて曰く^{いわ}「その問や適切なり。^{つまびら}審かにその^{ゆえん}所以を明かさん。」

第一 人のことを志す、必ずその目的とするところあり。目的正しからざれば、その行も正しからず。修行もその例にもれず。如何なるかは修行の目的？ 曰く、^{によぜ}如是法(注2)を把握し、如是(注3)の生活をいとなむにあり。故にいかに長年月に^{わた}亘って坐禅すとも、未だ^{いま}如是法をつかみ得ざればこれ禅者にあらず。如何なるか如是法？ 曰く、言いがたし。^し強いてこれをいわば、^{じじぶつ}事々物々をして^{しか}然るべきが^{ごと}如くあらしめおる天命(注4)そのものなり。真に如是法をつかみ得しが如きんば、^{これ}権力も^{いかん}財力も^{あた}地位も^{あた}貧乏も之を如何ともする能わず。たとえ仏祖の来りて修行を止めしめんと欲するも、^{あえ}敢て之を^な為す能わざるものなり。

故にもし人あつて修行中途にして挫折する者あらば、^{けっしょう}決定して未だ如是法をつかみ得ざる者と断言するを得べし。

第二 ^{また}禅亦宗教にして単なる^{あら}学問に非ず。故にその^{もと}基づくところのものは信なり。この何をか信すべき？ 曰く、宇宙に絶対なる如是法あることを信じ、^{しゃくそん}釈尊その如是法を体得せしことを信じ、歴代の仏々祖々その如是法を正しく伝え来たりしことを信じ、もし自己が骨折ら

ば百人が百人必ずこれを体得しうるものなるを信ず。

祖仏曰く【吾が証明を与え了りて尚未だ不信あるならば、来たりて吾が首を切るべし。】と。これを信ぜずして何ものをか信ぜん？ 信に徹せし者はことごと 悉く自ら肯うべなう。未だ信ありて去りゆく者を知らず。

修行中途にして挫折せし者は、悉く信を失いし者なり。

第三 大疑の下に大悟あり。古来大疑を抱かずして大悟せし者を知らず。修行の醍醐味は、ただ大悟徹底（注5）にあり。世上如何なる楽しみと雖も、これより大なるはなし。是人間幸福の極致なればなり。故に人間にしてこの楽しみを味わわんと欲せば、すべか 須らく大疑団を凝結すべし。如何なるか是自己本来の面目？ 死してのち如何？ 畢竟何のために生を嘗みおるや？ かくの如く大疑を発すべし。

身命財を投じ、心身二つながらに忘れて、この大疑に打入たにゆうすれば十人が十人必ず痛快な悟を得べし。

修行中途にして挫折せし者は、しんしょう 真正の大疑を発せず、大悟せざる者なり。

第四 禅は自力なり。人情杜絶とぜつ 自ら道なき所に道を拓きて進む。古人曰く【勇猛の衆生のためには成仏一念にあり。】（注6）と。果敢なる勇猛熱烈の心なくして、如何が関門の鉄壁を突き破ることを得べき？ 不断の精進なくして、悠遠なる山頂をきわめ得ざるは必定なり。撰心会に於いては万事を放下して正令当行しょうれいとうぎょう（注7）、平時の日々に於いては一日一炷香いちちゆうこう（注8）、かく境涯を進みゆく者にして未だかつて修行を止めし者なし。

修行中途にして挫折せし者は、勇猛精進を果たせざる懈怠けたいの輩やからなり。

第五 或る人の曰く、「こ 個の事の修行は世間事と両立せず。」と。これ修行の何たるかを弁わきまえざる笑うべきの言なり。元来「治生産業仏

法に相違背せず。」真に世間事に徹底親切ならば、必ず自らの力なきを感じて修行に馳せ参ずべし。己が職に真剣ならざる結果、修行の必要を痛感せざるがためなり。古来、世間事と仏道の修行とは車の両輪に例えられる。真正の修行者ならば、又世間に於いて範たるべし。能く大事業を成さんと欲せば、如何なることにも動ずることなき不拔の根基・高邁なる見識並びに着実な実行の礎地を確立すべし。現在世の指導者にしてこれらを正しく有する者幾人がある。人多きに非ず、人なきなり。敢て問う、現在之を得るの道は修行を措きて何処にかある？

修行中途にして挫折せし者は、世間事に於いて又十全にその責任を果し、その道の第一人者たるを保証せられ得ざるの輩なり。

第六 他をかえりみて修行を云々する輩は、悉く自己の脚下をかえりみず左顧右晒しおる者なり。他のくつがえりしを見れば、直ちに自己の戒めとなすべし。懈怠の者に眼を奪わるるは、自ら修行の眼目を逸して素凡夫（注9）に転落するのきざしと知るべし。もし範とすべくんば、京の五条橋畔に於て乞食に混じてその生活をする事20年、大燈国師の聖胎長養（注10）を以て範とすべし。自己の修するは大法にして、自己に対するはただ仏祖のみ。その間に第三者を介入せしめることなかれ。大山も蟻の一穴より崩る。雑用心（注11）することなかれ。

修行中途にして挫折せし者は、自らの脚下をかえりみず、左顧右晒せし輩なり。

第七 初め勇猛なれども、終り線香花火の如く消え去る者の、多くの障害となりし外在的素因をみるに、就職・妻帯・転住・事業失敗・家庭騒動・病氣・経済的不調等数々あり。この中、就職と妻帯とは学生にとりては二大転機にして細心の留意を要す。出来得べくんば時期当来以前に、最初の関門を打破する如く通身の熱意を投入し、見性入理（注12）の実を挙ぐべし。然るときんば（注13）、修行の本義を解し得て

これを以て第一義となし、就職・妻帯の余事は、その上に築かるべき事業と心得うる如き境涯に達し得らるべし。もし不幸にして茲に到り得ざる者は、「一日一炷香」、「摂心会必参」の願をたててこれを実行すべし。もし又転住等のため、支部を遠く離れて摂心会に参加し得ざるときは、道友を集めて師家を拝請するべくつとむべし。

修行中途にして挫折せし者は、人情におぼれ第一義底を失いし輩なり。

第八 修行の時期は、一義的にいわば老若を問わず。されど子細にみれば、青年こそこれを為すの適時なり。古来青年の修行は旭日にたとえられ、老人の修行は夕陽にたとえらる。むべなりというべし。

殊に学生は、年齢・身体・生活・繋累等の諸点に於いて最適の条件の下にあり。苟くも学に志せし学生が如是法を学ばずして、この何をか学ばんとするや？ 人間生活の根基を確立せんと欲せば、尊厳なる人格的自己の如実な絶対的把握を敢行すべし。ことの本来を行えずして人間の生、確立しえず。人生の根本は、生死の帰趨を明らかにあり。

大樹たらんと欲する者は、先ず地中を深く耕し来たって真正の種をまくべし。地上の多くの逸楽にふけり、スポーツに興じて時をすごす。楽しみを捨てて禁欲せよとは言わず。先ず宜しく学生の本分に立ち帰りて、ものの本末を分別すべし。自己に親切に、而して父母、同胞、天地に対してその恩を報ずべきなり。

修行中途にして挫折せし者は、学生たるの本分を弁えこれを十全に尽し得ざる輩なり。

第九 学生の中、知能すぐれし者往々にして社会の改革を口に叫び、宗教をいやしむ。その意気や誠に盛んなり。然れども、その実行を見るにまことに脚實地を離る。批判よ鬭争よと叫び、唯物論を口にしつつ、民衆を離れ観念的空転をなすは何が故ぞ？ 社会の革新を指導せ

んと欲して、先ず自らを革新せざるがためなり。然らざれば、畢^{ひっきょう}竟党利党略におぼれ、力を以て力を屈するの六道輪廻^{ろくどうりんね}（注14）をくりかえすのみ。社会の実情を科学的に把握するの方途を捨てよとはいわず。人格的实践の力と人類社会の帰趨を見透すの道眼^{どうげん}（注15）を備えて、その実践にあやまりなからしむべし。然らずんば、一盲衆盲を引くの結果に陥るや必定なり。

国家社会の指導革新に当らんと欲する者は、宜しく人に倍して修行に骨折るべし。

第十 如是法に二なけれど、宗教に多般あり。敢て、すべての宗乗をもって偽なりといわず。然れども良く内容の深淺邪正を鑑別するに非ざれば、終^{つい}に一生醉生夢死に終ることとなる。おそれおそるべきは、邪見の師なり。良^{りょうきん}禽（注16）は木を選ぶ。宜しく滴々相承^{てきてきそうじょう}（注17）の法脈を識別して、宗旨^{しゅうし}（注18）・人物の師とすべきを選ぶべし。

苟くも人間禅に参せんと欲する者は、予^{あらかじ}めその宗旨を明かに了解しておくべし。人間禅教団は人間禅の精神を以て立教の礎地となす。もし人あって「如何なるか人間禅の精神？」と問わば、言わん「宜しく『英山三転』（注19）に参じ去れ。」と。

まことに受けがたきは人身、遇^あいがたきは仏法、得^{しょうし}がたきは正師なり。光陰寸壁^{すんべき}（注20）の如し。雑用心して空しく光陰をすごすことなかれ。

修行中途にして挫折せし者にして、人間禅の精神を了得する者なしと。

（文責：編集部）

編集部注

（注1）聞くならく：聞くところでは。

（注2）如是法：大自然の生命。

（注3）如是：誠。

- (注4) 天命：大自然の生命。
- (注5) 大悟徹底：見性了々底の境涯。悟了同未悟（悟り了^{おわ}って未だ悟らざるに同じ）の境涯。
- (注6) 成仏一念にあり：見性成仏（見性入理に同じ。（注12）を参照）は、一瞬にしてできる。
- (注7) 正令当行：正しい仏祖の教えを実行せよの意。
- (注8) 一日一炷香：一日に少なくとも線香一本は坐禅をすること。
- (注9) 素凡夫：凡夫は迷える者。素は、ただのの意。
- (注10) 聖胎長養：大悟徹底した後、実際に悟了同未悟の境涯を得て利他のはたらきができるように、さらに正念工夫相続に骨折ること。
- (注11) 雑用心：世事に心を煩わすこと。
- (注12) 見性入理：迷いの根源である虚妄の我を殺し尽くし、大自然の生命と一体の真実の自己として蘇^{よみがえ}ること。
- (注13) 然るときんば：そうである場合は。
- (注14) 六道輪廻：六道とは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上という、六つの人間の迷いの境涯である。虚妄の我のために、煩惱や妄想に引きずられ、迷いの苦を脱却できないすがたを指している。
- (注15) 道眼：真理を把握する眼。
- (注16) 良禽：賢い鳥。
- (注17) 滴々相承：師から弟子へと仏法を正しく伝えていくこと。
- (注18) 宗旨：もっとも根本的かつ本質的な教え。ある宗派のよって立つ根本の思想と実践の教え。
- (注19) 『英山三転』：人間禅第一世総裁耕雲庵立田英山老師が創始された、人間禅の玄旨（奥深い趣旨）を体得するための公案。
- (注20) 寸璧：小さい、美しい玉。

著者プロフィール



白田劫石^{ごつせき}（本名／貴郎）

大正4年、東京生まれ。東京帝国大学倫理学科卒業。元千葉大学名誉教授。昭和12年、両忘協会立田英山老師に入門。人間禅三世総裁・師家。庵号^{まぜん}／磨甌庵。平成21年2月帰寂。